

第7章

生活のなかの
アツラー

お陰様で

日本語には「お陰様で」という言葉がある。「お元気ですか?」「はい、お陰様で」あるいは、「元気なお子さんが生まれておめでと〜」「ありがとうございます、お陰様で」とか、「商売繁盛のごようすですね」「ええ、お陰様で」といった具合。

「お陰様」には二通りの意味があるようだ。第一は、相手が直接自分を支援してくれた場合で、これは「あなたのおかげで」というニュアンスである。辞書には「相手の親切などに対して感謝の意を表す挨拶語」と書いてある。お医者さんのおかげで病気がなおったとか、お得意さんのおかげで商売繁盛というような場合がこれにあたる。

第二に、相手が自分に対して特に何かしてくれたわけでもないのに「お陰様で」と言う場合がある。単に謙遜してこう言う場合もあるが（優勝したのは本当は自分の実力だと思っているが、そう言うとうんざりと思われから）、この「お陰様で」の深層心理を覗いてみると、われわれは自分の力以外の何者かが助けてくれたと思っている節がある。辞書には「神仏の助け、加護」と書いてある。つまり目に見えぬものの存在が、自分にとって好ましい結果をもたらしてくれた、と思える場合、われわれは「お陰様で」と言う。

さてイエメンではこの「お陰様で」にあたるのは「アルハムド・リッラー」である。ハムドは「賞賛」、ヘリッラーの部分は正確には「前置詞のり」+「アッラー」であるから文字どおりには「アッラーに讃えあれ」という意味だが、この言葉に込められている気分は「今こ

ここで起こっているすばらしい出来事はアッラーのおかげなのだから、アッラーを讃えよう」ということであり、「お陰様で」と訳していいと思う。成功の原因が直接見えない場合でも、「誰のおかげか」はイスラム教徒にとっては常に明らかで、すべては「アッラーのおかげ」なのである。

ではどういふ場合に「アルハムド・リッラー」を使うのか。

その一。スリル満点のつづら折りのホデイダ道路を無事走り終えてサナアに帰りついたとき、運転手のアブドゥッラーは安堵のため息とともに「アルハムド・リッラー」と言うのである。確かにアッラーの加護でもなければ、あの危険な道を無事に走りおこせるものではない。助手席にいるぼくも思わず「アルハムド・リッラー」という気になる。

その二。友人を家に招いて羊の肉つきのちよつと贅沢な昼食を食べて満腹になったとき、ムハンマドは「アルハムド・リッラー」と言いながら、げつぷを一つして食後の紅茶を飲み始める。これは、われわれの「ごちそうさま」に当たる言葉である。外国語には「ごちそうさま」に当たる言葉がなくて、食べ終わった後に言うべき言葉が見つからず、なんだが落ちつかない気持ちになる場合があるが、この点アラビア語ではアルハムド・リッラーがあるので、心配は要らない。「今日食事にありつけるのも、すべてはアッラーの思し召しの賜もの」と、感謝の気持ちを含めて言うのが正しい。

その三。ドクター・ヤヒヤは日本からの援助を得るべくこの数年尽力してきた。そのかいあって、日本から医療協力の専門家がサナアに着任した。その専門家をサナア空港で出迎え、これから共にイエメンの医療の向上に尽力しよう^と決意したとき、彼はこうした喜ばしいことになったのも、すべてアッラーの思し召しであることを思い、万感胸に迫る思いを込めて「アルハムド・リッラー」と言わずにはいられなかった。

このあたりまでは、われわれにも容易に理解がいくし、共感もできる。しかし、次の例はどうだろう。

町の目抜き通りの交差点の手前、中央分離帯あたりに待ちかまえている乞食。信号待ちで車が止まると、寄ってきて車の窓から手を差し入れる。小銭を渡しても「ありがとう」と言うことはまずない。受け取った金を、さも当然というようすでさっさと懐にしまつて次の車に向かって歩いていく。「ありがとう」くらい言つてほしいと思うのは当然だが、彼らにしてみればあなたが金を恵んでくれたのは「アルハムド・リッラー」、つまりアッラーの思し召しによるものである。アッラーがこの乞食に金を恵んでやろうと思し召し、たまたまあなたをその道具に選んだにすぎない。誰を経由して渡すのも同じことなのである。別にあなたの代わりに口バからもらつてもよいのだ。あくまで、これはアッラーと乞食の関係にすぎず、その間に入つて金を渡す者の意思や善意はこの乞食にとつて何の関係もない。感謝すべきはただアッラーのみ



サナアのマナレットはこうした形状のものが一般的である。ただしマナレットに描かれる幾何学模様は一つひとつ異なっている。これは旧市街のダウド・モスク。ダウドとは旧約聖書の「ダビデ」である。

である。
だから逆にあなたが乞食に何も渡さなくとも、別に心苦しく感じる必要はない。あなたがこの乞食に金を渡したくないと思うのも、アッラーの思し召しであってあなたの責任ではない。

乞食をやりすごす最も粹な方法は、乞食が近づいてきたら、左手（イエメンは左ハンドルなので、乞食は車の左側から近づいてくる）の人差し指を真つ直ぐ上に向けるだけでよい。これは「アッラーに恵んでもらいなさい」と言うジェスチャーであり、乞食は納得して次の車に向かうのである。

もちろんイスラム教徒でないわれわれが、すべて彼らの論理に従う必要はない。だが、少なくともイエメンのように人口のほぼ百パーセントがイスラム教徒の国では、どうも森羅万象のすべてはアッラーの思し召しで動いているらしい。それ以外に世の中の秩序の源泉はない。われわれのような異教徒が紛れ込んでいるのも、アッラーのお目こぼしにすぎないのだ。だからこの土地に入ってしまったら、異教徒だからといってアッラーの秩序の外に逃げ出すことは不可能である。一日が無事に終わったとき「異教徒である私を今日も一日無事に過ごさせていだきましてありがとうございます」という気持ちをこめて「アルハムド・リッラー」と言えるようになれば、なかなかのイエメン通である。

ザカート
〈ザカート〉は「喜捨」である。仏教でも喜捨は、善男善女の行うべき重要な徳目である。しかし仏教では「喜捨」はどちらかというときと自発的行為であって、そ

れをしなければ極楽に行けないというたちのものではない。しかしイスラムではザカートは義務である。礼拝や断食と同じく信仰の五本柱の一つである。もちろん、与えるべき物を持たな

い貧しい者はこの義務から除外されるが、なにがしかでも与える余裕を持つている者はこの義務を果たさなければ正しいイスラム教徒とは見なされない。したがって最後の審判の日に地獄に落とされてしまうのである。

乞食にわずかな金を恵んでやるのは、このザカートの義務を實行することにはかならない。乞食が威張っている根拠はここにある。つまり、今ここに乞食がいるからこそ、あなたはアッラーの定めたもうた義務を實行する機会を与えられたのである。だからあなたは乞食に感謝すべきである。乞食があなたに感謝するのではないのである。

施しを与えた相手に感謝されないと、われわれはその善意が無視された、あるいは無駄になったかのように感じてしまう。与える者と与えられる者の二者だけを考えるとたしかにそう思える。しかし、ここにアッラーが介在すると、話は別である。

乞食は誰かから施しを受ける。これはアッラーからの賜わり物である。一方、施しを与えることはアッラーの定めた義務である。この義務を果たしたことによって最後の審判の日に天国に行けるようになる。つまり、施しをする者と乞食の二者関係であるようにみえて、実は施しをする者とアッラー、乞食とアッラーの二つの別々な二者関係なのである。生活の中にアッラーが介在しているというのはこういうことである。もともと、これは両者がイスラム教徒であり、共に死後、天国に行くことが目的である場合の話である。しかし、異教徒であるわれわれ

は、死んだ後アッラーに裁いてもらおうとは考えていない。せいぜい閻魔大王に裁いてもらうくらいが関の山である。だから、アッラーが評価してくれるかどうかは問題ではない。むしろ、いまここで乞食から直接感謝してもらいたいと思うのは道理である。

さて、同じ理屈で問題になるのは、例えばわれわれが経済協力、技術協力などのプロジェクトでイエメンに出かける場合である。素朴に発想すれば、当然先方から十分に感謝されそうなものである。しかし、である。それほどではないのである。ここにトラブルの遠因がある。もちろん、政府どうしの交渉のときには、外交辞令も手伝って過大な期待と感謝の気持ちが見られる。しかし、現場ではどうか。もちろん援助の現場にいるカウンターパートは日々われわれに接し、さまざまな技術を教えてもらうのであるから、人間どうしの情として、心からわれわれに感謝もし、われわれの立場に理解も示すだろう。だが、仕事場の上役とか、担当省の役人などはそうもいれない。それに職場の掃除のおばさん、門番のおじさん、紅茶汲みの少年などがあなたをどう理解しているかというのは、調べてみるとなかなか一筋縄ではいかない。

まず、日本が今や世界一の金持ち国であることは地球の常識である。一方、イエメンは地球の常識ではL.L.D.C（後発発展途上国）にランクされている。いわば貧者である。富める者と貧しい者の関係に関するイスラムの論理を国家間に適用すると、金持ち日本の政府がイエメンという貧しい国に援助するのは、言ってみれば当然である。イエメン国は援助に対して感謝して



モスクには通常回廊に囲まれた中庭がある。礼拝の方向がキブラ（メッカの方向）である。ジブラのアルワ・モスクにて。

いないのではない。謙虚に感謝してはいるのである。ただ大部分はアッラーに感謝しているので、われわれに直接向けられる感謝が足りないようにみえるのである。

被援助国と乞食を同列に扱うつもりはない、国家はいかなる場合でも主権があり、この点でまったく優劣なく同等だというのが近代国民国家システムの原則である。またイエメンの政府は日本に対しても他の欧米諸国に対しても物乞いをしているつもりはない。それでも与える者と受ける者の関係をとらえる論理回路は共通なのである。

またイエメンにいる日本人（欧米人でも同じだが）自身も、一般のイエメ

ン人よりもいろいろなモノを持っている。日本人はテレビ・ラジカセ・自動車・その他電気製品をたくさん持っているに違いないと、イエメン人は考えている。なにしろこういう家電製品は日本で作っているのだから、実際には持つていなくても、持つているはずだと考えるのは無理もない。それに、現にわれわれは飛行機に乗って日本からイエメンまでやってきたのだ。そりゃ、飛行機賃を払ったのはわれわれ個人ではなく、国だったり会社だったりする。しかしそんなことはイエメン人にとっては問題ではない。彼らは、そんな長距離の飛行機に乗った経験はない。飛行機に乗るのは金持ちの特権である。つまり、あなたは金持ちである。

そして年間国民所得でみた場合、イエメン人は日本人に比べてはるかに貧乏である（実際の生活の場においては家の広さや何やかやで彼らのほうがよっぽど豊かな生活をしている場合もあるが、これは国民所得統計の問題ではない）。もらっている給料の額をドル換算すると桁が違うのである。そこで日本人（欧米人もそうだが）がイエメンに技術協力にくるのは富める者の義務である。義務を果たしてきた人々にそれほど多大な感謝をする必要もない。アッラーに感謝しさえすればいいのである。もちろん、われわれもアッラーに感謝すべきだ、というのが彼らの論理である。

仏教でも、「悟った」人なら、施しをして感謝されようなどと思つてはいけない、と言う。しかし、途上国援助は結構苦勞が多いのである。生活するにも仕事をするにも、日本にいれば

しなくて済むような苦勞をしなければならぬ。それでもなお、貧しい人々の手助けをしたいという気持ちで、ここまでわざわざやってきたのである。「来なくてもよかったのにわざわざ来たのだ、せめて感謝されたい」と思うのは人情であろう。

しかしわれわれが富める者である以上、イエメンで直接感謝されることなど期待してはいけないのかもしれない。

悟りの境地に入るべきなのだろう。アッラーはあなたの善行を認め、閻魔大王に通知してくれるにちがいない、と信じて。

アッラーの 何かを始めるとき、敬虔なイエメン人は必ず口の中でもごもごと「ビスマッラ名において (アッラーの御名において)」とつぶやく。この言葉はいろいろな場面で使われるが、その場面場面で込められているニュアンスが少しずつ違う。

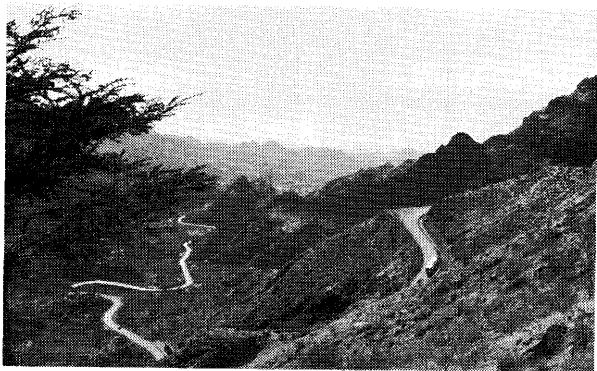
まずアッラーの加護を願う場合。

山岳地を上下していくタイヤズ道路を通ってタイヤズに行くときに、ドライバーのアブドゥッラーはエンジンをかけ、アクセルをふかして出発する直前に必ず「ビスマッラー」と言ったものである。厳かに言うと、なんだか靈験あらたかなおまじないのように聞こえるので、ほくも長距離ドライブに出かけるときにはまねをしてこのまじないの言葉を唱えるようにしていた。この言葉に本来そんな意味はないが「無事に着けますように」というニュアンスである。このお

まじないは効くようだ。なにしろぼくはこの道を何回も往き来したが、おかげで事故もなく日本に帰ってきたのだから。もつとも、この言葉を口にするだけで、自分の気持ちを引き締める効果はあるのだろう。

第二に、アッラーの思し召しに感謝する場合。

「いただきます」に相当するアラビア語は「ビスミッター」である。アッラーの名において、われわれはこの食事にあることを確認し、感謝するのである。この食事は私がお自分の力だけで手に入れたものではない。アッラーの加護があつてこそ、今こうして食べさせていただけなのです、という気分を込めた「ビスミッター」である。キリスト教でも食前の祈りとして「天にまします我らが神よ……」と言うようだが、それほど格式張ったものではない。ほとんど「いただきます」という感じである。ふだんは何も言わずに食べ始める者も多い。ただ、友人や客を招いて



アッラーの加護なくしてこの山道を時速80キロで走ることはできない。サナア=タイズ道路，サマラ峠近く。



犠牲祭前の羊スーク。男たちがあちこちで、少しでも安く良い羊を買おうと交渉中である。サナアのヌクム・スークにて。

いつもよりちよつとご馳走が並んだときには
たいていの人が口にする言葉である。

第三に、アッラーに屠殺の許しを乞う場合。
イエメン人にとって最大のご馳走は羊である。
お祭り、お祝いには羊は欠かせない。た
だし、羊ならどんな羊の肉でも食べていいと
いうわけではない。イスラム教徒によって屠
殺されたものでなければならぬのだ。そし
てイスラム教徒が動物を屠殺するときには、
必ず「ビスミッラー」と唱える。殺生をする
ときにはアッラーの許しを乞わなければなら
ないのだ。そうでない仕方では死んだ肉は、ど
れほどうまそうであつても食べてはならない。
「ビスミッラー」があれば、その肉は浄であ
り、そうでなければ不浄である。だから、家
畜に病死、交通事故死などされてしまうと、

商品価値がゼロになってしまふので極力こういう事態を避けなければならぬ。鳥肉も同じである。イエメンではふつうスークで生きたままの鶏を買い、羽をつかんで持ち帰り各家庭でさばくが、鶏をしめるときにも「ピスミッター」は欠かせない。

ところで日本にいるときはけっして肉を口にしないイスラム教徒も多い。イスラム教徒が豚肉を食べてはいけないのは有名だが、食べてもよいことになっている牛、羊肉も食べない場合がある。味付けが口に合わないこともあるが、それよりも殺されるときに「ピスミッター」と唱えられていない可能性が高いからだと言う。確かに日本で屠殺業に従事している人のなかにイスラム教徒がいて、屠殺のたびに「ピスミッター」と言っているとは思えない。こういう人がいるので、日本に住んでいるイスラム教徒用には、オーストラリアでイスラム教徒が屠殺した羊の冷凍肉が輸入されているらしい。

最後に、そして最も大事なのは契約のとき。

「ピスミッター」はビジネスにせよ、外交にせよ、契約や取決めをするときにはなくてはならない言葉である。アラブ世界ではどこでも、契約書のいちばん上の行の真ん中にアラビア語で「慈悲深く、慈愛あまねきアッラーの御名において」と書きこむ。この言葉がないと、いかにサインが本物であろうとも、正式の契約書と見なされない場合がある。契約には必ずアッラーの立ち会いが必要なのである。

アッラーの名においてなされた約束だけが人間の行動を束縛することができるのであって、人間どうしだけで何かの取決めをするなどは不遜な行為である。将来について決定するのはただアッラーだけの権限だからである。

このことは、政府が国民に対して命令や布告を出すときでも同じである。国家がその権力だけを根拠に国民の行動の自由を束縛することはできない。アッラーの名において出された場合のみ、その命令や法律は有効なものになるのである。だから、政府の公文書や公報では、用紙のいちばん上にワシをかたどった国章とともにこのフレーズが印刷してある。

こうして、イエメンでは何か物事を行う度にアッラーの名が唱えられる。人々の生活の中には常にアッラーがいるのだ。口癖になってしまえば、いちいちアッラーの存在を意識しながら言うわけではないのだから、とにかく、生活の隅々にまでアッラーの目が届いており、人間は（少なくともイスラム教徒は）このアッラーの目から逃れることができない。というのが、平均的イエメン人の世界観である。

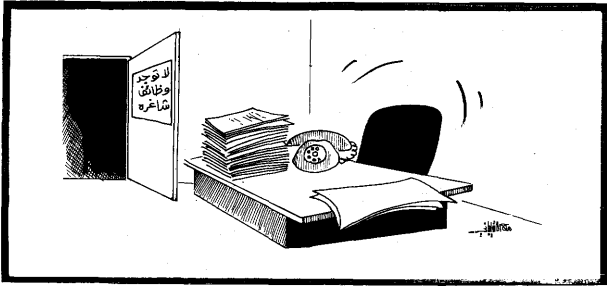
インシャ・アッラー

ほくの大嫌いな言葉に「アラブのIBM」というのがある。なぜ嫌いかと言うと、アラブに対する片寄った先入観を日本人に植えつける言葉だからである。この言葉は、一九七三年の石油ショック以後、急激にアラブ世界と接する機会が増えた日本のビジネスマンを中心に広まった言葉で、覚えやすいし、意外性もあるし、そ

れなりに気のきいた言葉であることは認める。もちろんコンピュータメーカーの話ではない。ご承知の方も多いと思うが、「アラブのIBM」とは、よく使われる三つのアラビア語を揶揄したものである。Iは「インシャ・アッラー」つまり、「アッラーの思し召しあらば」、Bは「ボクラ」つまり「明日」、Mは「マーレーシュ」すなわち「気にするな」という言葉のそれぞれ頭文字を表す。

さて、アラブのIBMは、どういうときに使われるか。例えば役所に何かの書類を作ってもらいにいくとしよう。窓口で「いつできますか？」と尋ねると「来週の月曜日に。インシャ・アッラー」と答える。次の月曜日に役所に行くが、まだできてない。そこで「書類は？」と聞くと、相手は「ボクラ（あした）」と答える。翌日の火曜日に行くとまだである。「いつできるんだ」と聞くとまた「ボクラ」である。水曜も木曜も「ボクラ」でかわされ、いい加減頭にきて「月曜にできると言ったじゃないか」と怒鳴ると、相手はすました顔で「マーレーシュ（気にするな）」と言う。一種の小話のようなものである。確かにこういう状況はイエメンでもよく発生する。相手はこういう輩なのだから、書類の遅れぐらいでイラついてはいけない、と言うのが「アラブのIBM」という警句の主旨である。この点についてはほくも異存はない。

ただ、これは日本人との接触が最も多いエジプトでの経験をもとにできあがった警句であった、正確には「エジプトのIBM」と言うべきである。だからこれからエジプトに赴任しよう



役人がどこかへ行ってしまっているオフィス。入口には「空いているポストはありません (No Job Vacancy)」と貼り紙がしてある。(出所) *al-Thawra* 紙, 1987年7月18日。

とする商社マンには有用なアドバイスではあっても、それ以外のアラブ世界にそのまま当てはまると考えると、間違いのもとである。アラブ世界で使われている言葉はアラビア語であり、基本的にはエジプトでもイエメンでも同じである。しかし日本語にも方言があるようにアラビア語にも方言がある。例えば「マーレーシュ」と言う言葉は、エジプトでは頻繁に使われるが、イエメンではそれほどではない。たまに使われても「ごめんなさい」のニュアンスが強く、上の例のような責任回避のための言葉としては、用いられない。

「ボクラ」については、まったく同じ使われ方をする。窓口などでは本当にこの言葉に泣かされるものである。何度か泣かされた後、ぼくはこの言葉を「明日」と訳するのが間違いのもとだと気づいた。役所の窓口で使われる場合「ボクラ」は「明日」という意味ではなく、「今はやらない」という意思表示にすぎないのだ。これを明日

だと勘違いするから、こつちも頭にくるのである。

ところで、問題は「インシャ・アッラー」である。これを「アラブのIBM」の主旨にそつて訳すと「たぶん、しない」となる。「やるかもしれないし、やらないかもしれない、そのところでは確約できない」と訳してもいい。そしてこつち訳すことがエジプトの文脈では正しいのである。しかしエジプトだけがアラブではない。

イエメンに赴任が決まって、日本人の書いたアラブに関する紀行文や入門書を読んできた人は、この「アラブのIBM」という「常識」が頭にインプットされている。そして「インシャ・アッラー」は「たぶんしない」と訳すものだとして決めてかかっている。しかし、イエメンでは多くの場合「インシャ・アッラー」は「たぶんしない」ではなく、「きつとする」という意味に使われる場合のほうが多い。

アッラーの言葉であるコーランには、「イスラム教徒たるもの、約束をしたならば、最後に必ずインシャ・アッラーという言葉をつけ加えるのを忘れぬように」と書いてある。人と人が将来に関する自分を自分たちだけで決定してしまうのは不遜である。すべての運命はアッラーの手の中にあるのだ。明日二人が会おうと思つても、今夜どちらか一人がアッラーの意思によつて天に召されるかもしれない、そのところを知つてゐるのはアッラーのみなのである。だから自分たち二人だけで明日のことを決めてはならない、というのがこの言いつけの主旨で

ある。だから敬虔なイスラム教徒であるほど、必ず約束の最後に「インシャ・アッラー」をつける。彼の心の中を覗いてみれば「アッラーがそれをお許しにならない場合にはできませんが、そうでないかぎり必ずやります」という気持ちである。言いわけの伏線を張っているつもりは毛頭ない。

しかし、くだんの日本人はこれを「たぶん」と訳すものだ決めてかかっている。カウンタ・パートのアリー氏が「では明日八時に役所でお会いしましょう、インシャ・アッラー」と言ったとき、彼は「こいつ、あしたさぼる気だな」と理解した。彼は仕事の段取り上どうしても明日中に書類が欲しかった。そこでアリー氏に「インシャ・アッラーと言うな」と詰め寄ったのである。アリー氏はそれほど有能とは言えないが、敬虔なイスラム教徒である。大事な約束だと理解しているからこそ「インシャ・アッラー」をつけなければならぬと感じたのである。ところがこの日本人は「インシャ・アッラーと言うな」と命じるのである。いったいなぜだろう。アリー氏には理解できない。

約束を確認しておきたいのだろうと考えたアリー氏は「とにかく、明日八時に、インシャ・アッラー」と繰り返した。日本人は自分の主張が無視されたのでさらに激した調子で「インシャ・アッラーと言うな」の一点張りである。ここにいたってアリー氏は理解した「はあ、この日本人は俺をイスラム教徒でない異教徒におとしめようとしているのだな。もしかするとこ

の男は悪魔（ヘシヤイターン）の使いかもしれない」と。以来、アラー氏はこの日本人の言うことを決して信用しないようになってしまったのである。

アッラーの他に

神はない

中東諸国では入国審査の際に書き込む書類などに「宗教」の欄がある。ここには、自分の信じる宗教を書けばよいのだが、多くの日本人は信じる宗教など持ち合わせていない。かといって「無神論」と書くほどの大胆さを持ち合わせてもいない（持ち合わせていても、中東諸国ではそんな無謀なことは書かないほうが賢明である）。そこで、初詣には神社に行くから「神道」とか、死んだらたぶん仏式で葬式をするから「仏教」とか、結婚式はキリスト教式でやったから「キリスト教」とか書くことになる。よく自身は平均的日本人として「神仏混淆」なのだが、そのように書いても入国審査の係官にはわかりっこないし、その場でアラビア語で説明する自信もないから、彼らにもわかるように「キリスト教」と書いていたものである。

これは中東諸国に仕事でよく出かけるようになったときよくが採用したやり方で、純真なキリスト教徒からは叱られそうだが、嘘も方便である。とにかく、いかに空港や役所でのトラブルを未然に防止するかが中東諸国を効率的に回る際の鍵である。

入国に当たって神道を一から説明するのは日本語でだって簡単ではないし、仏教は「偶像崇拜」だとしてイスラム教徒は嫌っている。とりあえずイスラムと同根の宗教であるユダヤ教、



庶民の足ダッパープ（乗合タクシー）。すべて日本車、乗車定員は8名である。

キリスト教なら、彼らにも理解しやすい。しかしご存知のとおり、アラブ諸国はユダヤ教の国イスラエルと常に戦闘状態にあり、ユダヤ教徒などと書けばいつそう面倒なことになる。そこで残る選択肢はキリスト教だけである。カトリックだろうがプロテスタントだろうが入国審査官には興味がない。出張などで空港の窓口を通過するだけなら「キリスト教」がいちばんいいのである。

しかし、ある程度の期間住み着くとそうは問屋がよろさない。入国審査官は非イスラム教徒と接する機会も多いが、普通の人々のなかには、この世にイスラム教徒以外の人間がいるなんて想像もできないような人々が山ほどいるのである。たまたま乗り合わせたダッパープ（乗合タクシー）のなかで、突然となりに座っているじいさんに「おまえの宗教はなんだ」と聞かれたりすると不意をつかれてドキッとする。なるべくにこやかに、反感を買わないように「キリスト教徒だよ」と言う。こちらの発音も悪い

のだが、これがなかなかすんなりとは通じない。もしかしたらこのじいさんはキリスト教という言葉を知らないんじゃないかと思うこともある。若い人が同乗していれば、じいさんに正しい発音で通訳してくれる。じいさんはぼくがイスラム教徒ではないと理解する。ここからである。「なぜアッラーを信じんのじゃ」「アッラーの他に神はないぞ」さらに「アッラーを信じぬ者は最後の審判の日に地獄の業火で焼き尽くされるのじゃぞ」までくると、じいさんのぼくを見る目は哀れみでいたたまれない、というふうになってくる。

ぼくだって、そのへんのところはコーランを読んで知っている。だが、ぼくが読んだのは残念ながら日本語である。コーランはアラビア語以外はまがいものなのである。読めなくなったら章句をそらで覚えているじいさんのほうに分がある。こうして、乗っている時間が長びくとダッバブを降りるころにはぼくはイスラムに改宗するか、地獄に落ちるか二つに一つを選ばなければならぬところまで追いつめられている。幸いその前に降りる場所が来ると「そのうち改宗するよ、インシャ・アッラー」と言って飛び降りる。この場合の「インシャ・アッラー」は「先のことはアッラーが決めるから、ぼくには責任がない」という意味である。「だぶん、しない」と訳せるかもしれない。罰あたりな言い逃れではある。

同じ異教徒でもまだキリスト教は一神教という点でイスラムと近親関係にある。コーランでもイエス・キリストはムハンマドに先行する預言者として正式に認められており、許容範囲で

ある。許容範囲の外にあるのが多神教、無心論、偶像崇拜者などである。具体例をあげると共産主義者や仏教徒ということになる。

毎年ラマダーン（断食月）の一カ月間はテレビも宗教番組が多くなり、イスラム拡張期の物語が二十回シリーズくらいで放映される。たいてい白馬に乗ったイスラム教徒軍が異教徒を次々滅ぼしていくストーリーで、ラマダーン中の宗教心を鼓舞するにはうってつけの内容である。ある年に放映されたシリーズは、どうやら中国あたりに攻めていくあら筋で、相手は仏教国という想定であった。そのなかにイスラム軍団の攻勢を受けて「皇帝」と大臣が王宮で右往左往する様子がコミカルに描かれるシーンがあった。皇帝と大臣は苦しいときの神頼みとばかりに、仏像に向かって「ブッダ・ブッダ・ヤーブッダ、ブッダ・ブッダ・ヤーブッダ」とおろおろしながら情けない顔つきでひたすら頭を上げ下げしながら祈るのである。「真の神でない偶像に祈っている愚かな者」というのが、このシーンで強調したかったことなのであろう。偶像崇拜の愚かしさを強調する効果は確かにあった。しかし、見ている仏教徒としては、あまり良い気はしない。こうした番組を作っているのはだいたいレバノンかエジプトである。仏教に関して何の予備知識もないイエメン人は、この番組を見て仏教徒に対するイメージを植えつけられる。その翌日にはとてもではないが、ほくは仏教徒であるとは言い出せなくなるような描かれ方であった。もっともわれわれ日本人のほうもイスラムとか、アラブに対してかなりいい加減なイ

メージを抱いているし、それをテレビのなかでおもしろおかしく拡大再生産しているのだから、お互いさまと言うところだろう。

それでも親しい友人と話すときには、ぼくは仏教の擁護をした。そのときの理屈は「仏陀は預言者である。彼は、人々に正しい道に入るための導きをしたのであり、この点でムハンマドと同じである」というものであった。かなり説得力のある理屈で、何人かの友人は熱心にうなづきながら聞いてくれたものである。この理屈のポイントは神は一つであり、モーゼもイエスもムハンマドも仏陀も同じ神から派遣された預言者であるという点にある。しかし、仏教の立場から言うと、これはもしかしたら罰あたりな説明なのかもしれない。

サナア旧市街のあまり観光客が入り込まない住宅街の一面を歩いていたときのことである。向こうから歩いてくるじいさんが、すれ違いざまに何やらぼくに向かってつぶやいた。挨拶の言葉をかわしたのだろうと思ったが、ぼくにはなんと言ったか聞き取れなかったので一緒に歩いていたイエメン人の友人に「じいさん、何て言ったの？」と訊ねた。彼は困ったような顔をしてみせた。一瞬ためらいながら「異教徒が増えてサナアも嘆かわしいことになったわい、というようなことを言ったんだよ」と教えてくれた。ぼくはそのじいさんに対して怒るよりも、むしろ本当にすまないような気がした。彼らの町に異教徒がずかずか入り込み、彼らの生活領域の中をほっつき歩いているのが、サナア育ちのじいさんには、アッラーに守られているはずの故郷を

踏みにじられるような気がするのかもしれない。

イエメンにはイスラム教しか似合わない。どんなに理屈をこねようとも異教徒は異教徒にすぎないのだ。

断食月

ある年、ぼくは断食（ラマダーン）月にイエメン人と一緒に断食をしようと思いついた。一度くらい断食というものを経験し、どういう心境になるものか試してみたと思つたのだ。

ラマダーン中は、太陽が出てから沈むまで何も口にはいけないことになっている。タバコもいけない。水もダメ。自分の唾液を飲み込んでもいけないという人もいる。年に一度イスラム教徒が宗教心を試されるのがラマダーンなのである。だからラマダーン月は神聖月である。この月ばかりは普段はあまり熱心でないイスラム教徒も、敬虔な信徒になつて心を浄める。この月はすべての人が善男善女になる月なのである。といつて仕事が休みになるわけではない。断食をしながら仕事をするのはつらいはずなのに、この月のイエメン人は結構みんないい顔をしているのである。確かに能率は低下するし、勤務時間は短くなるから、仕事は一向にはかどらない。しかし高級官僚になると仕事量をそれほど減らすことなく日常業務をこなしていく。それも結構にこにこしながら、楽しそうにやっているのである。断食をしながらそういう善男善女の顔ができるものだろうか、彼らができるのだからぼくにだってできるだろうと、始めて



ラマダーン中は商売も夜にシフトする。サナア旧市街の干しブドウスークにて。

みたのである。

ラマダーン中は通常の夜昼がひっくり返ると思えばよい。日中は何も食べてはいけなから、夜間に昼間の分まで食べるのだ。日没後のお祈りの直後に一回（これがほんとのブレットファスト＝断食の中断である）、真夜中に一回、そして朝日の出る前に一回、都合三食食べるのはいつもと同じである。おまけに人々は夜の間に昼間の分を取り戻すように親戚や友人の家に遊びに行ったり、子供たちは裏通りでサッカーしたりする。当然カートも夜になる。そして朝日が昇ったら疲れて眠るのである。断食の時間を最も楽に過ごすには寝ているのがいちばんである。寝ている間は空腹も喉の乾きもあまり気にならない。

こうした人々の生活リズムに配慮して、官庁の勤務時間は通常の八時～二時が、十一時～三時に

なる。おかげで人々はゆっくり朝寝ができる。どうせ昼ご飯は食べないから終業時刻が少しくらい遅くなっても構わない。

社会全体が断食していれば、個人が断食を守るのはそれほど困難ではない。イスラムは個人の宗教ではなく社会の宗教であるということが一番よくわかるのがラマダンのときである。イエメン人のなかに入ってそれほど熱心でないイスラム教徒もいるだろうが、総じてみんな断食をよく守るのは、それよりほかにしようがないからである。特に一人暮らしで自炊をしない者にとっては断食するよりほかに選択肢はない。日中はどこに行っても食べられないからである。すべてのレストランは昼の間は固く扉を閉ざしているし、食料品店もほとんど開いていない。外国人用のホテルでは一応レストランはやっているが、外国人だつてこそそそ食べるのだ、イエメン人が入っていけば周囲から白い目で見られるのは必至である。だから、みんな善男善女になるのである。

エジプトなどではキリスト教徒もかなりいるので、ラマダン中でもキリスト教徒用にレストランが開いている。当然キリスト教徒は合法的に昼間食べることができる。そこで不心得ないイスラム教徒はここに紛れ込んで断食破りができる。イスラム教は社会の構成員全員がイスラム教徒であるとき、すなわち社会の宗教であるときに、最もその力を発揮する。イエメン人はほぼ百パーセントイスラム教徒だからこそ、すべての人が断食を守るのである。そこでこの

月の間はイスラム教徒でないわれわれもラマダーンのリズムに合わせなければならぬ。イスラム教徒と一緒に仕事をする場合、こちらでも彼らの前で飲み食いしないのはもちろん、タバコも控えてあげるべきである。車の中でタバコを吸っていて、お巡りさんに注意された日本人もいる。ラマダーン月の間はイエメン中が断食するのである。われわれがイスラム教徒であるかどうかは関係がない。郷にいつては郷に従え、である。どうせそこまでつき合わされるのなら、いつそのこと断食までつき合ってもたいした違いはない。

仕事をしないで寝ているだけなら一月くらいの間、日中何も食べないでいるのもそれほど困難ではない。しかし、まねごとにせよ仕事に出かけるとなると、空腹がこたえる。特に身体がまだラマダーンのペースに慣れていない最初の一週間くらいがもつともつらい。毎年やっているイエメン人でさえこの最初の一週間がいちばんつらそうである。

ほくは昼飯時になると目が眩んだ。それでも夜明け前に起きてきちんと食べれば、昼過ぎまではもつのだが、うっかり寝過ぎすと初めから空腹で一日をスタートする羽目になり、昼を待たずにふらふらになる。このときのラマダーン月はちょうど六月のいちばん暑く、日中の長い時期に当たっていた。白状すると、ほくは二度ほど、夜がうつすらと明けたころ目がさめてあわててコーン・フレイクを食べた。これはルール違反である。そこで、寝過ぎさないために日本人の友人と徹夜トランプをするという手を思いついた。彼らもどうせ仕事の始まりが遅いの

で夜更かししても差し支えない。こうなるとラマダーンのための夜更かしが、夜更かしの言いわけとしてのラマダーンかよくわからなくなる。異教徒である日本人でさえそうである。町中がお祭り気分なのは推して知るべしだろう。

さて昼間、空腹を抱えて町なかを車で走っていると幻覚とはいわれないまでも、思いもかけないものが目の前に浮かんでくるものである。あるときは突然コカ・コーラが飲みたくなって瓶の姿がちらついたし、また急にタイ焼きのあんこの味が思い出されてむしろように食べたくなつたときもあった。別にコカ・コーラやタイ焼きが好物というわけではない。普段は忘れていのに空腹時に無意識下から突然沸き上がってくるのである。これは貴重な経験であった。

こういう幻覚を見るようでは、いつ断食破りをしたくなるかもしれない（コーン・フレークは見逃してもらおうとして）し、ぼくの断食のために友人たちを毎晩徹夜させるのも気の毒なので、ぼくはマウル村に出かけた。村に行けば、友人のアブドの家をやっかいになり、彼らと同じペースで食事をするしかないので断食破りをする恐れはない。夜明け前もたたき起こされるから食べ過ぎず心配はない。正しいラマダーンを送ろうと思つたら村に行くに限る。ただ朝寝のできないのがつらかった。農作業を朝の涼しいうちに済ませたいから、人々は遅くとも七時頃には起きて畑に出る。ぼくもアブドについて畑まで行ったはいいがとても草むしりだの、農薬撒きだのをする元気はない。日陰で朝寝をして仕事が終わるのを待つだけである。都会の断

食がいかにも楽ちんか身に滲みて知った。

畑から戻って昼まで一寝入りし、それから村の若い衆と連れだつてのドライブが日課であった。もちろん夜はカートである。ラマダーン月の間は、断食さえしていればあとは大手を振つて遊べるので、気分は夏休みのようなものである。だからみんなこの月を結構楽しみにしているのだ。

ラマダーン月も後半になると身体が慣れてくるので断食自体はそれほど苦痛ではなくなる。しかし、仕事を機嫌良くするという境地には残念ながらとてもなれなかつた。ぼくがそう言うとき、ムハンマドは「イエメン人だつて、子供は三十日のうち初めの年は十日、次の年は十五日、というふう慣らしていつて、十四、十五歳で一人前の断食ができるようになる。おまえだつて、慣れれば楽に断食し、機嫌良く仕事ができるようになる。最初の年からうまくはいかないさ」と慰めてくれた。

ともかく、こうしてラマダーン月は無事に終わった。ラマダーンが終われば待ちに待つたラマダーン明け大祭（イードル・フィットル）である。日本でいえば盆と正月が一緒にきたようなもので、多くの人は帰省し故郷で親類・縁者と断食明けを祝う。役所も一週間ほどは休みになる（正式の休みは三日間ほどだが、出勤する人がいないので実質的に一週間休みと同じである）。外国人もこの期間に休暇をとつてヨーロッパなどに遊びに行く。

さてぼくはラマダーン終了と同時に、頭痛と発熱で寝込んだ。ラマダーン中の後半にひいた風邪をこじらせ、体力が消耗していたので長引いたのだ。ようやく症状がおさまったころには楽しみにしていたラマダーン明け休みは終わり、休暇でヨーロッパに行っていた日本人の友人たちも帰ってきた。医者である友人の一人は、ぼくの症状を聞いて「そりゃ髄膜炎だったかもしれない、死なないでよかったね」と言った。

一方、苦勞してラマダーンを経験してみたものの、ムハンマドに言わせると「断食までしてイスラム教徒にならないのは、無知で異教徒であるのよりもっと悪い」のだそうだ。ふんだり蹴ったりである。興味本位の断食などするものではないと思ひ知ったのであった。